



Title	張紅蘭と李商隱：近世後期詩壇に於ける晚唐詩受容の一断面
Author(s)	福島, 理子
Citation	語文. 1995, 62-63, p. 55-63
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68871
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

張紅蘭と李商隱

——近世後期詩壇に於ける晚唐詩受容の一断面

福 島 理 子

一

文化十四年八月、再度の江戸遊学を終えた梁川星巖は郷里曾根村に帰りついた。揖斐川の西畔、金生山の麓に位置するこの村は梨の畠が今も多く残り、四月ともなると純白の花が辺り一面に咲き乱れる。彼はその居所を「梨花村草舎」と名付け、ここに今古の書を渉猟し、近在の子弟に句詠を授ける日々を得た。この塾に一人、際だって聡敏な娘が熱心に詩作を学んでいる。それは彼の縁続きに当たる西稻津家の景、幼名きみという少女である。

景の父は稲津長好。長好は星巖の祖父稲津長宅の異母弟長朝の子で、星巖と景とは再従兄妹にあたる。景の祖父長朝はその父長直の没後分家し、以後長朝の家系は西稻津家と称せられている。景は幼時より利発で、八、九歳の頃より華溪寺の太随和尚について句詠を受けていた。太随もまた星巖、景の同族稲津家の人で、星巖の祖父長宅、景の祖父長朝の弟である（長朝と同腹）。星巖も幼時太随和尚に学び、青年に到るまでその庇護のもとにあった。

さて、景は梨花村草舎で星巖に師事し、接するにしたがって、彼の為人と才とを慕い、その伴侶として添い遂げたいと望むようになる。

つたらしい。景の父長好もまた星巖の人物を見込んで二人の縁談を進め、文政三年春、二人は夫婦の契りを結んだ。しかし、中国の儒教道徳では同族同士の結婚を忌むため、儒者たる彼らはこれを意識して、景の姓稲津を改め張と称することとしたと言われている。張氏とした由縁としては、西稻津家の祖である長朝の生母朝岡氏が、祿二百五十石を食む尾張藩世臣の家の出であったため、尾張の「張」を取ったと言う説がよくあげられるが、これはかなり疑わしい。家に支障があるならば、養子という形を取るのが当時一般である。例えば頼山陽の妻梨影が小石元瑞の養女として嫁したように、景も某氏の養女として一旦縁戚関係を切ってから、星巖に嫁いだと考える方が自然ではないか。その某氏は或いは伊藤信氏¹⁾が別説として挙げられる長谷川氏であったかも知れない。長谷川家と稲津家とは曾根村の二大名家で、同じく華溪寺を菩提寺としている。華溪寺の『曹元山過去帳』には明治になってからの事ではあるが、長谷川家より稲津家の養子となった例も窺え、両家の仲は親密であったらしい。長谷川氏を中国風に修して「張」氏と称した可能性も十分考えられる。

文政三年当時、星巖三十二歳、景十七歳。彼は漢の張敞が妻のために眉を自ら描いてやったというエピソードに託して、ごま塩頭の

自分が若い妻と睦んでいる姿を戯れに詠じている（余年甫めて三十二にして新たに娶る。乃ち二絶句を作して、以て自ら調す。『星巖集』甲集卷二 梨花村草舎集）。ところが、その蜜月を幾ばくも送らぬ内に、星巖は新妻を残して独り旅に出る。ただ『三体詩』絶句の部を彼女に手渡し、裁ち縫いの仕事の合間にもこれを読み、暗誦して置くようにと命じて、飄然と家を出たのである。二人が不仲であったとも思えない。三河から駿河、遠江をめぐる間に彼が彼女を思つて詩を賦したと伝えられている（村瀬藤城「跋録梁伯兔四絶句後」『庸齋三稿』）。彼を彷徨に駆つたのは家庭生活に安住することへの恐れであらうか、或いは自ら廃嫡の身となり、また自ら髻を落とした彼の不羈の魂であつたのだろうか。文政五年の春再び飄然と帰宅した星巖に、彼女は『三体詩』の絶句のみならず律詩までも暗誦して見せ、彼の賛嘆を得たと言う。詩人たる自らにふさわしい伴侶をここに認めたのであらう、生涯彼は遊歴を繰り返すがこの後常に彼女を伴ひ、万里をと共に渡る駱駝のごとく窮困も歓楽も共にし、彼女を詩人、そして画人として育て導いた。

張景、名または景婉。字玉書、月華、後に道華。号紅鸞、後に紅蘭と改める。世に女丈夫として知られる張紅蘭女史、その人である。

二

芳草蝶飛図五首。録三（第三首）

故台芳草置煙霏 故台の芳草煙霏を單む
万古青陵事已非 万古青陵事已に非なり
愛此貞魂团不散 愛す此れ貞魂团して散ぜず
春風随所作双飛 春風随所に双をなして飛ぶを

（『紅蘭小集』卷一 芙蓉鏡閣集 文政三十五年の作）
春秋時代、宋の康王はその舎人であつた韓憑の美しい妻に横恋慕し、彼女を奪おうと韓憑を捕えた。韓憑は自殺してしまつたが、妻は康王にはなびかず、夫の後を追つて青陵台より身を投げたという。今ではもやにつつまれた草ばかりが生いしげるこの物見台に、二人の堅い操が二度再び離ればなれになるまじと、つがいの蝶に姿を変えて春風の中を飛び舞っている。

青陵台には、その右と左とに離して葬られた二人の墓の上にそれぞれ木が生え、大きくなつて互いに枝を指し交わしたという有名な「相思樹」の伝説が別にある。韓憑とその妻が二匹の蝶に姿を替へたという伝説はいわば前者の異説である。この異説の方を賦した詩が星巖にも見られる。

韓魂與莊夢 韓魂と莊夢と

誰復弁其真 誰か復た其の真を弁ぜん

（蝶）尾聯『星巖甲集』卷一 蝨海集）
韓憑が蝶に姿を変えたと言う話は『太平御覽』や『事文類聚』などには見られないが、『淵鑑類函』に『山堂肆考』の「俗伝、大蝶必成双：曰韓憑夫婦之魂」という記述が引かれている。しかし星巖は『淵鑑類函』或は『山堂肆考』などよりも、李商隱の詩「青陵台」を意識していたのだらう。

青陵台

青陵台畔日光斜 青陵台畔日光斜めなり
万古貞魂倚暮霞 万古貞魂暮霞に倚る
莫訝韓憑為蛺蝶 訝るなかれ韓憑蛺蝶となるを
等閒飛上別枝花 等閒に飛上す別枝の花

星巖は文政十一年にもこの故事を引いた詩を作っている。

青陵台畔蝶双飛

青陵台畔蝶双飛し

金谷園中花零落

金谷園中花零落す

貞魂不死万万古

貞魂死せず万万古

長笑琴心胡茄拍

長へに笑ふ琴心胡茄の拍

(「京華女兒曲」「星巖丙集」卷二 京甸集)

「青陵台」「貞魂」「万古」の語を含む「京華女兒曲」詩や紅蘭の作はより李商隱の影響を明確に示している。

同様の例をもう一つ挙げてみよう。嘉永五年四月、二人は古琴一張を手に入れた。軫下に「老龍」と刻されたこの琴は梅花様の断紋を帯び、五百年前のものとおぼしく古色蒼然としている。しかし、貧乏儒者とその妻にこのような高価な器物が簡単に購えるはずはなく、彼女の着物や装飾品などを金に替え、やっとの事で工面した。紅蘭の「買琴歌」にはその次第をかく述べている。

書生大都閑閑資

書生大都閑閑なし

何況寒酸貧女兒

何況況んや寒酸の貧女兒をや

連城之価争弁得

連城之価争でか弁じ得ん

抜釵脱裙纔償之

釵を抜き裙を脱ぎ纔かに之を償ふ

(「紅蘭遺稿」「買琴歌」)

「抜釵脱裙」の語は、これより二十年遡る天保三年十二月、二人が江戸に移り南八丁堀に居を定めた時、その光景を詠じた星巖の

又是旅庖煙不得

又是れ旅庖煙するを得ず

脱君裙衩抜君釵

君が裙衩を脱し君が釵を抜く

(「十二月望日宅を八丁溝に賃す。貧なること甚しく、五絶句を作して、以て自ら戯る。」「星巖丙集」卷八 夷白齋集)

が頭にあったのだろう。この折の貧窮ぶりも甚だしく、紅蘭も賦して同じく

傭役尖頭臨乞米

尖頭を役して乞米を臨するに傭し

裙衫送盡拔花鈿

裙衫送り盡して花鈿を抜く

(「客居」「紅蘭小集」卷二 芙蓉鏡閣集)

と言っている。これらの語は李商隱「無題」詩の「裙衩芙蓉小。釵茸翡翠輕(裙衩芙蓉小さく。釵茸翡翠輕し)」、及び「驕兒詩」に見える「抜脱金屈戌(金の屈戌を抜き脱がす)」等を利用している。

文化四年、江戸に赴いた十九歳の星巖はまず古賀精里の門を叩き、昌平黌に学ぶべく勉強していたが、官学の門は狭く、山本北山の開いていた筭疑塾に身を置くこととなる。古文辭格調派を批判した北山に誘われ、清新詩を標榜する江湖詩社が市河寬斎のもとに開かれたのが天明七年。それから二十年、彼らの南宋詩風の精緻な表現や、酒脱な竹枝詩、さらに遊里詩は江戸の詩壇を席捲した。時に菊池五山は三十九歳、大窪詩仏は四十一歳、柏木如亭は四十五歳。彼らと接した若き星巖の詩風が同じ色合いに染められたことは想像に難くない。

再度文化七年の江戸遊学期、さらに星巖は江湖詩社の詩人達との交際を深めたが、この間宋詩風の非なることを悟り、翻然唐詩風を奉ずるようになった。ただし、唐詩風とは言っても、それは無論江戸中期、盛唐詩にのみ範を求めた護園派詩人達のそれとは趣意を異にしており、むしろ中晩唐の詩人を重んじている。例えば西帰後まもなく『晚唐李杜絶句』を編撰し、上梓していることにまず当時の彼の志向がはっきり示されている。また、新婚当時星巖が留守中の課題として手渡したのが『三体詩』であったことにもその一端が窺

える。『唐詩選』が杜甫・李白を中心とする盛唐及び初唐詩人の作を多く収めるのに対して、『三体詩』では李白・杜甫を一首も収めず、杜牧、賈島、司空圖、李商隱、白居易など中晩唐の詩人の作が圧倒的に多く採られている。

星巖集を繙くと李商隱、杜牧、李賀、李群玉ら晩唐詩人の詩句によった表現が非常に多いことに気づく。前に挙げた「蝶」の詩も文化八年、江戸での作である。また、星巖は杜牧に傾倒しており、彼に言及したものが少なくない。かかる星巖の指導を受けて、紅蘭の詩風が中晩唐の詩風に傾くの不思議はないが、彼女は殊に李商隱の影響が強い。しかも、星巖の詩句を援用するにとどまらず、自ら李商隱の世界を逍遙し、自身の詩境を開く資としてしているのである。

三

從勝山至八幡途中

怯熱青鞋発五更 熱を怯れ青鞋五更に発す

乾坤寂々惟鶏鳴 乾坤寂々惟だ鶏鳴

蘭干纔借殘星照 蘭干纔かに借る殘星の照らすを

髮髻已紅初日明 髮髻已に紅なり初日の明らかなるに

去路稍消涼露滴 去路稍く消ゆ涼露の滴り

前村行覓火塵生 前村行くゆく覓ゆ火塵の生ずるを

懸崖置屋兩三店 懸崖屋を置く兩三店

好息疊嵐山水清 好し息はん疊嵐山水の清きに

〔紅蘭遺稿〕天保十二年

暑くならぬ間にとわらじをつけて夜明け前に発つ。ひっそりと静まり返った天地の間。一番鳥の声のみがしじまを破る。空に残り

た星のきらめきを頼りに行くうち、高く空を紅に染めてすっかり朝日が輝いてしまった。領聯にある髮髻の語は唯一の例を除き、殆ど見る機会のない語である。その唯一の、しかも「日」と共に用いている例が李商隱の次の詩である。

水精眠夢是何人 水精眠り夢むるはは何人ぞ

欄菜日高紅髮髻 欄菜日高くして紅髮髻たり

〔李商隱「日高」詩〕

「髮髻」の意には諸説有るが、紅蘭はおそらくは清の朱鶴齡注に「高大の貌」とあるのを参照し、日の高く昇った様子と解釈したのであろう。

あるいは、安政元年の作、「越智仙心の水樓に宿る」詩に

香魂片片喚不返 香魂片片喚べども返らず

三弄声流漁笛船 三弄声は流る漁笛の船

〔紅蘭遺稿〕

と言うのも、李商隱「人の真娘の墓に題するに和す」詩の

一自香魂招不得 一たび香魂の招き得ざるより

祇応江上独嬋娟 祇だ応に江上独り嬋娟たるべし

を意識しているだろう。

辭典が多く、極めて難解な李商隱詩を紅蘭はよく誦んじ、自らの作品に編み込んでいる。換言すれば、李商隱詩の世界が紅蘭詩の深い部分で関わっているのである。次の作は紅蘭四十四歳の折、その感懷を賦したものである。

偶成

四十多愁方作衰 四十愁ひ多くして方に衰へを作す

堂無錦葆可憐兒 堂に錦葆可憐の児なし

何来黄蝶解人意 何来の黄蝶人意を解するや
妝点石榴紅一枝 妝点す石榴の紅一枝

(弘化四年『紅蘭遺稿』)

私ももう四十歳を数え、重なる愁いごとに身の衰えを感じずにはいられない。せめて、美しいむつきにくるまれた愛くるしい赤ん坊の一人でもいれば、心の支えとなるものを。この初二句は単に自らの境涯をそのまま述べたごとくに見える。が、実はこれもまた李商隠の詩をふまえているのである。

驕児詩

衰師我驕児 衰師我が驕児
美秀乃無匹 美秀乃ち匹ひなし
文葆未周辟 文葆未だ周辟ならざるに
固已知六七 固より已に六七を知る

(中略)

爺昔好読書 爺は昔読書を好み
懇苦自著述 懇苦して自から著述す
顚顚欲四十 顚顚四十ならんとして
無肉畏蚤蝨 肉無く 蚤蝨を畏る

(後略)

同じ衰えを感じる四十歳とはいえ、李商隠には利発でやんちゃな子供がいる。七十二句からなるこの長詩には、まるで湯の沸き立つように跳ねまわるかと思えば、客の前ではおじもし、蜘蛛の巣をひっかけ、花の蜜を吹い、お化粧箱をこっそり開けることもののしぐさを愛情込めて描くとともに、無為のままに老い行く身をふりかえり、読書人としての焦燥を述べている。紅蘭の言う「四十」歳はこの詩

を意識し、それと対比することによって一層彼女の孤独が深まる仕組みになっている。紅蘭詩の「錦葆」も李商隠詩の「文葆」によったものであろう。あるいは「文」を「錦」に替えるに当たっては、同詩の「古錦請裁衣（古錦にて衣を裁つを請ふ）」とあるのに引かれたかもしれない。かかる例に従えば、さらに次のような読みも可能になるのではないか。

鴨水寓樓作 第五首

暮鐘来和水禽声 暮鐘来たり和す水禽の声
影斂山山眉黛横 影斂まり山山眉黛横たはる
石瀨無風亦無月 石瀨風なく亦た月なし
微燈紅定数痕明 微燈紅定まりて数痕明らかなり

(『紅蘭遺稿』弘化四年)

鴨川畔のたそがれを描き出した一首。あたりはすっかりくれなずみ、水鳥の呼び交わす声が響く。夕陽が沈んで山は眉をひいたように連なり、風のない浅瀬にはせせらぎの音も静かである。ただぼんぼつんと紅のともしびが闇夜にうきあがり、微かではあるが消えることなくともりつづけている。山の姿を表現するのに「眉」あるいは「黛(色)」という例は少なくないが、「眉黛」の語がやはり李商隠の「代贈・二首」の第二首に「總把春山掃眉黛」と見られる。

さて右の詩では特に結句の「微燈の紅」が「定」まりて「明」らかなりと表現したところが眼目であろう。ここで思い出されるのは、李商隠の有名な「碧城」詩中の一句である。

若是曉珠明又定 若し是れ曉珠明又た定らば

一生長對水精盤 一生長く對せん水精盤

(李商隠「碧城」三首、第一首尾聯)

「琴瑟」「無題」詩にならぶ、彼の代表的な艶情詩であるが、またそれらと同様非常に難解な詩で、尾聯二句にも従来さまざまな解釈がなされている。「曉珠」とは、朱鶴齡注には「飛燕外伝」を引き、漢の成帝が班婕妤に与えた不夜の珠のことで、月のごとき光彩を放ち、美醜によらず人を皆美麗にみせたものという。一方、清の馮浩はそれを太陽と釈く。他にも諸説あるが、「曉珠」が「明又定」、即ちその輝きがいままで変わらずまばゆくあったならば、愛が失われることはないであろうとの比喩にかかつていく。つまり「明」にして「定」なる輝きは愛の時間を約束する。とするならば、紅蘭詩の中のともし火が、そのほのかなあかりのもので愛を交わす男女をはのめかしているものとも読める。星巖夫妻は弘化四年当時鴨川畔、狭斜の巷に程近い二条木屋町に寓していた。「道学先生」とも揶揄された紅蘭ではあるが、この詩などなかなか艶冶な趣を醸し出しているのではないだろうか。

四

星巖に詩風の転機が訪れたのは、文化七年から十四年にかけての、二度目の江戸遊学の間のこと、葛西因是の『通俗唐詩解』（享和二年跋）を見るに及び、宋詩風を一擲し、唐詩風へ転じたといわれている。この説はおそらく星巖が文化九年に賦した「因是庵の唐詩解」を読み、後に書す詩で、この書を絶賛していることにもとづくものと思われる。『通俗唐詩解』は上下篇各五十首、初唐から晩唐にいたる諸詩人の詩を一首乃至数首ずつ挙げて国字解を施し、初学者の便宜に供したものである。収められたものは総て七言律詩。必ずしも晩唐の詩人の比重は高くなく、李商隱の詩は「隋宮」「錦瑟」

「馬嵬」三首を挙げるのみである。前に述べたごとく星巖が晩唐詩に強く傾いていたことを思うと、ただ因是のこの試みに引かれたためとは思えない。そもそもかかる初学者向けの書により彼の詩風が一変してしまっただけとは思えない。文化年間当時、星巖を取り巻いていた江戸詩壇の状況を今一度見直してみよう。

越後の館機、字は樞卿、柳湾と号す、巻大任、字は致遠、弘斎と号す、一に菱湖と号す、二人同じく中晩を宗として、而して小しく其の趣を異にす。

（菊池五山『五山堂詩話』卷三 文化六年刊）

館柳湾は、書肆万笈堂英平吉と提携し、文化四年に『晚唐十家絶句』、同六年には皮日休と陸龜蒙の唱和を収めた『四詠唱和』や『晚唐十二家絶句』『晚唐詩選』と晩唐詩のアンソロジーを陸續と刊行、詩壇の注目を集めた。更に同七年には『中唐十家絶句』、八年には巻菱湖と共に、香奩体をもつて知られる晩唐韓偓の詩を集めた『韓内翰香奩集』を和刻している。書家でもある巻菱湖は同じく新潟の人で、柳湾が「堂友」と記していることから父方の従兄弟であったかと考えられる。柳湾より十五歳年下であるが、共に晩唐詩風を志向し、莫逆の友として遇し合っていた。「性靈清新の説を唱ふる」詩匠に率いられ「慕習の徒が一時に相和し」ていた（巻菱湖『篋中集』館柳湾序）当時、二人の活動は異彩を放ったものであったらしい。彼らは単に晩唐詩集の和刻に携わるばかりでなく、その作風もまた晩唐風を帯び、繊細、艶麗な詩境を展開して行った。館柳湾の『柳湾漁唱』初集巻一に文化十一年詠の次の詩が見える。

香奩体。分賦源氏伝。得明石篇

香奩体。分ちて源氏伝を賦し、明石篇を得たり

幾歳幽居滄海隈

幾歳か幽居す滄海の隈

秋來見月陟岡來

秋來月を見て岡に陟り來る

含情暗算弄珠日

情を含み暗に算ふ 珠を弄するの日

一夜流光入蚌胎

一夜流光蚌胎に入る

「源氏伝」即ち『源氏物語』の諸帖を分けて競作したというもので、柳灣は明石の帖を詠んでいる。近世初期の儒者達にとって淫書の尤なるものであった源氏物語が人の「情」の機微を書き表したものとして儒者たちにも評価されるようになったのは、中期以降の事とされる。後期に到るとそれが詩題に取り入れられ、盛んに賦されるようになり、例えば九州の儒者原古処に文化九年、源氏物語諸帖を賦した五言絶句「読源語雜詠」十首、同十二年の「読源語」五十四首がある。ところで、柳灣はこの試みを「香奩体」と称している。確かに宮廷の女性の戀愛を綴った源氏物語の世界は、同じ宮女や閨房に主題を取った艶治な香奩体こそふさわしいものであるが、逆に言えば、晩唐詩風を享受するさまざまな試みの一環としてこの源語詠がなされたのであろう。ちなみに文化九年の古処の源語詠も江戸祇役中に作られたものである。

こうした江戸文壇の新しい動きは関西の詩人にも伝わり、少なからぬ刺激を与える。文化十一年五月、菅茶山は備後神辺を発し、江戸再訪の途についた。大坂、京を経て、翌六月五日神田小川町の福山藩邸に入った茶山に、京都の頼山陽は早速東都の文壇の状況を尋ねている。

江戸之詩文如何御座候や、ヤハリ隨園を金科玉条に仕候や。文は金聖嘆、書は清朝舶商のみと奉存候。中晩詩を稍々読候ものも有之と承候、如何に候や。

（文化十一年七月十五日付、頼山陽書簡）

江戸に中晩唐詩に通じた詩人が居るとの噂は既に彼の耳にも達していたが、京や江戸の詩人達を小馬鹿にしていた山陽にとってもこれは聞き捨てならぬ一事であつたらしい。

茶山は江戸で、昌平黌儒官であつた古賀精里らと旧交を温めるほか、大田南畝、さらに大窪詩仏・菊池五山ら江湖詩社社友らとも往來し、江戸文壇の空氣を満喫した。九月下旬、勝田鹿谷の寿宴に招かれた茶山は日本橋百川楼に赴く路上で奇しくも亀田鵬斎と邂逅する。遅れて寿宴に駆けつけんとした茶山と、既に宴を辞して帰途にあつたほろ酔いの鵬斎と、未だ面識がなかったにも拘らず、鵬斎は茶山を一見してその人と悟り、やおら彼の手を取って語りかけたという。そして相伴つて再び宴に戻り、飲を尽くした（『黄葉夕陽村舍詩』後篇 卷五所収「余亀田鵬斎と未だ始めて相識らず……」詩題）。いかにも儒俠鵬斎らしいこの逸話は文壇の佳話としてよく知られているが、正にこの鵬斎こそ、館柳灣、巻菱湖の師であつた人である。また翌年江戸の茶山に宛てた山陽書簡に

巻大任（菱湖）之話は、近來之一奇に御座候、京地敵此奇無御座候。

（文化十二年正月十九日付、頼山陽書簡）

という条がある。どうやら茶山が菱湖にまつわる傑作な逸話を報じてきたらしい。その逸話の現場を茶山自身が目撃したのか、人づてに伝え聞いたのか定かでないが、仮に菱湖、柳灣らと面晤の機を得られなかったとしても、茶山は晩唐詩に心を寄せた彼らの活動を程遠からぬ所で見聞きし、それに触れる機会を得られたには違いない。この東遊中の日記に、江戸着後間もない六月五日「元寿をして書肆

英屋を招かしむ」という条がある。元寿は茶山の門人である豊後の甲原元寿。書肆英屋は柳湾と共に晩唐詩集を刊行したかの万笈堂英平吉に相違ない。同年七月三日にも「書肆英屋来る」とある。

文化十一年冬、茶山は江戸で次の詩を賦している。

源語六十帖詩人代

黄鳥藏身入柳堤

黄鳥身を藏めて柳堤に入る

翠陰深処好安棲

翠陰深き処好し棲を安んずるに

奈何花氣来相襲

奈何せん花氣来りて相襲ふを

更向天桃枝上啼

更に天桃枝上に啼く

〔黄葉夕陽村舍詩〕後編卷五 二首中第一首

前に挙げた柳湾の香奩体詩と思ひ合わせると、茶山のこの作が當時の江戸にあつてこそ作られ得た、晩唐詩風の影響の一端を示すものではないかと考えられる。

茶山と山陽の噂話にも上った巻菱湖は、星巖より十歳ほど年長であるが、星巖は彼と江戸遊学の間に心を通じ、兄事するようになった。彼の若き頃の書風は菱湖の影響を非常に強く存しているという。星巖は文化十一年、江戸を離れ信越の間に遊んでいた菱湖を慕い、「巻致遠を夢む」という詩を賦している。菱湖との交友は西帰の後も続き、文政十年十一月、京に遊んだ菱湖は木屋町にあった星巖の寓居に暫く滞在している。また、天保三年、東遊の途についた星巖夫妻は、十月江戸に到るや菱湖の宅に身を投じ、十二月八丁堀に居を定めるまで留寓しており、互いに気の置けぬ親しみぶりが察せられる。

さらに、星巖は館柳湾にも接する機があつた。新潟柏崎へ移る原松洲のために文化九年五月巻菱湖が催した送別の宴に招かれた凡そ

十人の中に、館柳湾、菊池五山、大窪詩仏、葛西因是、そして星巖がいたことが『因是文稿』上巻所収「送原生序」により知ることができる。

巻菱湖が知己の詩を選び集めた『篋中集』の中には柳湾の詩が最も多く採られているが、星巖も中に一首挙げられており、「伯鬼の詩近日大に進境す」との評がなされている。星巖の晩唐詩への愛好がかかる交友の中で培われたものであらう事は疑いない。

五

韓偓の「香奩集」と李商隱の「無題」詩は詩史に冠たる二大艶情詩といえるが、それらが近世詩壇に親しいものとなったことは、詩情としての恋愛の情を重んずる袁隨園に傾倒していた江戸詩人達の領分を、より艶なる方向に拡大する効果があつたらう。また各地に生まれつつあつた女流詩人達にとつても、それは漢詩の世界を覗く格好の窓口となつたはずである。

星巖が「是は小生と違ひ、道学先生にて詩は余り作り不申候へば、理屈計り申候」と言つたことや、婦徳を謳つた詩が屢々見受けられることなどから、紅蘭には脂粉の気の無い、説教臭い印象が付きまとう。しかし一方で、九州行の途次福岡の亀井昭陽を訪うた際、昭陽が別後紅蘭を評して「艶冶宛かも娼婦の如し」と貶したという逸話などは、彼女を全く異なつた婀娜な女性として見せる。彼女が派手に装っていたのではないことは、例えば村瀬藤城が「珠翠を装はずして、天然の丰顔あるもの」(文政五年「白鷗社集会図記」)と述べていることから予想できるし、貧乏儒者夫妻が旅中の身、まして装飾を調えることなど叶わなかつたであらう、おそらく紅蘭は、

星巖のもとに集う文人達に互して、当時の女性らしく慎ましく控え
ている事なく、対当に談笑を交わし、時には戯れ興じる位の事はは
ばからなかったのではないか。そうしたいかにも人慣れした態度は
昭陽の氣に障ったであらう。また或いは、星巖に敵うべく学問を積
み、千里の道を時には夫を引つ張りながらたどりおおせた彼女の情
熱が、時には奔放とも受けとめられかねない危うさを含んでいたの
かも知れない。しかしなお、彼女の詩に気づかれるのは、彼女自身
の中にあった「艶」やかな情感である。晩唐詩、中でも李商隱の甘
美な旋律がその心の深奥にまで響きわたり、おそらくは彼女の中に
潜んでいた「艶」なる詩魂を呼び醒まして行つたのであらう。

注

- (1) 伊藤信著『梁川星巖翁附紅蘭女史』大正十四年、梁川星巖翁遺徳
顕彰会。
- (2) 村瀬藤城『藤城詩文鈔』所収「晩唐李杜絶句序」に「星巖居士、
輯晩唐李義山杜樊川絶句而梓之」(『藤城遺稿』昭和二年刊)。
- (3) 清の馮浩注では髪髻はグラグラするさまで、「日」ではなく、「葉」
即ち芍薬を形容し、それが揺らぐ様子を美人のまどろむ様に例える
とする。
- (4) 中村幸彦氏「幕初宋学者達の文学観」『文学は「人情を道ふ」の
説』ほか(『中村幸彦著述集』一)。
- (5) 森統三氏の考証による(『巻菱湖遺事』、『森統三著作集』一二)。
- (6) 文政九年頃、竹堤社時代の旧友宛の星巖書簡。伊藤『星巖翁』
(注一)所収。
- (7) 弘化四年「当世名家奇譚」の紅蘭を「高慢淫乱」とする口さがな
い戯評が物議を醸したと伊藤『星巖翁』(注一)にある。

——日本學術振興會特別研究員、本學研究生——